

東京女子大学礼拝堂

東京都杉並区

「建設×史材」では今号から1年間、「コンクリート」の土木構造物・建築物を紹介する。

日本の建築に鉄筋コンクリートが使われ始めた初期の傑作と言えるだろう。モダニズム建築の旗手、前川國男、吉村順三らが師事したチェコ出身の建築家、アントニン・レーモンドの代表作だ。1938年の竣工時は、内外観ともに当時としては斬新なコンクリートの打ち放しだったが、戦時中に外壁を迷彩塗装。戦後は現在の白色に塗装された。内部の柱、梁、壁、天井に歴史を刻む打ち放しが現存する。礼拝堂は、オーギュスト・ペレが設計したパリ郊外の「ル・ランシーの教会」をモチーフにしたと言われている。

外壁はプレキャストコンクリートによるステンドグラスのフレームで形づくられ、その幾何学デザインが強く目を引く。ステンドグラスは実に42色もある。なかに入った途端、淡いグラデーションの光に包まれ、時空を超えたカタルシスが全身に広がる。ある記憶がよみがえってきた。20年ほど前、巨大な石造ドームのなかで、ステンドグラスから差し込む朝日が目の前の空気を淡いブルーに染めたのだ。トルコのイスタンブールにあるブルーモスク（スルタンアフメット・モスク）での強烈な記憶である。

アントニン・レーモンドは、礼拝堂・講堂だけでなく本館、東西校舎などを設計し、更にキャンパス全体の計画者でもある。レーモンドのコンクリートの建築は、打ち放しの自邸が開口部の工夫などで「呼吸する衣装」と言われたように、内外空間のつながりを一つの特徴としていた。初代学長、新渡戸稲造が掲げたりベラルアーツ教育の場は、レーモンドの開放的な空間とうまく呼応したのであろう。建学の精神の象徴として学生らが歴史を継承している。



東京都杉並区善福寺に1920年代から30年代にかけて整備された東京女子大学のキャンパスは、その文化的価値が評価され、礼拝堂など7つの建物が国の登録有形文化財に指定されている。当時珍しかった鉄筋コンクリートと打ち放しの技術導入から進取の気風が伝わってくる。

